

2.② 日系農業者団体女性部の女性活躍推進研修

日系農業者団体女性部を対象に、花きの栽培、食品製造等実地体験を交えて、日本の農村女性の取組を視察すると共に、女性をはじめとする農業関係者と交流を深めた。

1) 基本情報

期間	平成 31 年 1 月 13 日～2 月 3 日（計 24 日間）
場所	東京都、栃木県、埼玉県、愛媛県、長野県
研修生	8 名（ブラジル 5 名、アルゼンチン 1 名、パラグアイ 1 名、ボリビア 1 名）
内容	本研修ではグリーンツーリズムや民泊といった地域活性化の取組を学んだ。愛媛では JA 女性部との交流に加え、地域の特産品を活かした商品開発を学んだ。また研修生の関心に合わせて、一部の研修生は「こんにやく実習」および「専門研修：花」の行程に参加した。

2) 研修生

No.	性別・年代	国	組織	業務
1	女性 50 代 2 世	ブラジル	APPC 農協	生産者
2	女性 50 代 2 世	ブラジル	レジストロ日伯文化協会	地域活性化委員
3	女性 40 代 2 世	ブラジル	コパセントロ農協	生産者
4	女性 50 代 3 世	ブラジル	ブラジル農協婦人部連合会（ADESC）	食品販売
5	女性 50 代 2 世	ブラジル	ブラジル農協婦人部連合会（ADESC）	食品販売
6	女性 40 代 2 世	アルゼンチン	メルコフロール（Mercoflor）	生産者
7	女性 70 代 1 世	パラグアイ	ラパス日本人会	生産者
8	女性 40 代 2 世	ボリビア	沖縄移住地婦人部	イベント装飾

3) 日程

日数	日付	曜	内容	場所
1	1 月 11 日	金	サンパウロ出発（※合同）	
2	1 月 12 日	土	機中（※合同）	東京
3	1 月 13 日	日	羽田到着（※合同）	東京
4	1 月 14 日	月	とちぎ花センター、あしかがフラワーパーク（※合同）	栃木
5	1 月 15 日	火	オリエンテーション（※合同）	東京
6	1 月 16 日	水	ファームインさぎやま（※合同）	埼玉
7	1 月 17 日	木	JA 横浜 料理教室・女性部交流	東京
8	1 月 18 日	金	日比谷花壇、店舗（Hibiya-Kadan Style、WONDER FLOWER）（※合同）	東京
9	1 月 19 日	土	休日	東京
10	1 月 20 日	日	愛媛へ移動	愛媛
11	1 月 21 日	月	えひめフーズジュース工場	愛媛
12	1 月 22 日	火	JA にしうわ八幡浜女性部交流	愛媛
13	1 月 23 日	水	JA にしうわ八幡浜施設視察	愛媛
14	1 月 24 日	木	遊子川ザ・リコピーズ	愛媛
15	1 月 25 日	金	東京へ移動	愛媛
16	1 月 26 日	土	休日	東京
17	1 月 27 日	日	休日	東京
18	1 月 28 日	月	中間総括（※合同）	東京
19	1 月 29 日	火	信州せいしゅん村（民泊、農村活性化事業）	長野
20	1 月 30 日	水	信州せいしゅん村（食品加工施設、そば打ち体験）	長野
21	1 月 31 日	木	信州せいしゅん村（福祉施設）	長野
22	2 月 1 日	金	研修総括、農水省表敬訪問（※合同）	東京
23	2 月 2 日	土	羽田出発（※合同）	東京
24	2 月 3 日	日	サンパウロ到着（※合同）	

※若手農業者等の育成研修「専門研修：花」と合同で実施



とちぎ花センターの見学



グリーンツーリズム（草木染体験）

4) 研修の成果・考察

- 農村女性の起業の事例として、遊子川ザ・リコピンズを訪問。同団体は愛媛県西予市遊子川地区においてトマト加工品で起業し地域活性化に取り組んでおり、辻本代表が力強く語った奮闘の連続であった活動の話は研修生の心をゆさぶり、強いインパクトとエネルギーを与え、背中を押すような講話となった。
- 女性団体との交流としては、JA横浜女性部、JAにしよう八幡浜女性部との料理講習・意見交換会を実施。地域の特産品を活かした料理メニューを学ぶことに加え、日本と南米間の距離はあったとしても同じような取り組みをし、同じような課題を抱えていることを共有し、どちらでも盆踊りを一緒に踊ることで、心理的な距離はぐっと短くなったようであった。また愛媛県では特産品のみかんを使った加工品が食品（ジュース、お菓子、調味料）から化粧品まで多種多様にあることが大きな驚きであり、自分の地域でも特産品を活かした商品開発をしたいという声が聞かれた。
- 長野県上田市では、農村活性化に取り組む信州せいしゅん村で民泊・そば打ち体験や食品加工施設・福祉施設の訪問をした。自国で村おこし委員をしている研修生にとっては、古民家の活用方法や地域を盛り上げていこうとする信州せいしゅん村の取組が非常に参考になったとのこと。自分達の活動にとって多くのヒント・活力を得た研修となった。

5) 研修生による報告書（原文表現尊重）

a. 有益であった点・特に印象に残った点

- 地域住民や行政が知恵を絞り、力を合わせて行動することによって様々なプロジェクトが可能になり、それは地域が抱えている問題を地元の人々が把握し、それについて提案し主体となって行動に移すということがみえた。そこには必ず幾つかのキーパーソンがいて、うまく繋がりを作り、地域のことを思い、根気強く取り組むということが感じられた。
- 愛媛県遊子川ザ・リコピンズ（農家レストラン、加工施設、交流会）で見て感じたことは、山奥の高齢者が55%を占める小さな限界集落で農業に経験もない夫婦がよその町からやってきて土仕事をやりたい熱い思いでトマト作りをはじめ村の人々と共に町おこしに成功していること。市場に出回らないトマトを利用してトマト酢作りに成功し、トマト酢をベースにトマトソース、ケチャップ、ドレッシング、青トマトの粕漬けなどを開発し販売。農家レストランを週二回開きトマトと地元の素材を生かした料理を作り、人気のトマト酢ベースの商品も販売してよそからの団体やお客がくるほどの人気になっている。
- JAという組合が日本のあらゆる地域で非常にたくましく、それに関わる女性の多さに感激を覚えました。JA横浜では、キッチンサロンのような近代的な設備を持ち、女性部が活動するための設備状況を整えられるという、しっかりとした協同組合でした。
- 愛媛県のJAにしよう八幡浜に訪問した際にはミカン農園を見せてもらった。傾斜地でモノレール

を利用して栽培していることに感銘を受けた。さらに明治時代から栽培されているみかんに誇りをもって取り組んでいる姿勢が印象的だった。

- ファームインさざ山の訪問では、自然とふれあう生活体験、土地の素材を利用して楽しむこと（草木染など）など、グリーンツーリズムがとても意義のある活動ことに気づいた。子供達にとっても、農業や自然の大切さを学ぶことができる素晴らしい機会となる。

b. 所属先・地域に還元したい研修での学び

- 古い建物を再利用し、ゲストハウスや住民の憩いの場を設け、地元の素材で作った普段のお料理、お茶を出してもてなしをされる女性たちがいた。そこには、地域に古くから伝わってきた風習について物語る民具が飾られてあり、建物自体に見られる古の匠などがとても印象的であった。形のある物ばかりでなく体験という形のないものも貴重な商品だということを学べた。
- 愛媛県遊子川のザ・リコピンズの代表者の事例は自分の状況にも近く、学ぶことが多かった。何も経験のないところから村の人々と力を合わせてトマトの製品開発と限界集落の村おこしに取り組む経験を話してくれ、やればできるという精神を伝えてくれた。

c. 帰国後の所属先・地域での改善・新たなビジネスの可能性

- 農村地帯の後継者の問題や高齢化、少子化、離農などに直面している私たちの村を地元の方達と共に考えみんなの思いを育む地域のデザインを作る。それを実行するためには第三者の目も必要だという事も分かり、今ある農村の生活環境の魅力を再定義し、観光資源として見直す必要がある。
- コパセントロでは女性部たちと、大豆とトウモロコシを使った料理コンテストを開催したい。さらにエプロン、ヘアバンドなどを売って、お金を作り、新しい取り組みをしたい。
- えひめ飲料ではミカンの砂囊（つぶつぶ）を取り出すための工程を見せてもらった。ここで得られた知識を活かして、将来的につぶつぶジュースやその他の加工品に果肉を使用するという、商品開発を進めたい。



JA 横浜での料理講習会・意見交換会



JA にしうわ女性部との交流会

2.③ 農業・食産業分野に係る専門家派遣による研修（中南米現地）

専門家派遣研修は、中南米現地でニーズの高い、日本食、施設園芸および農業経営について、3つのコースに分けて専門家を派遣した。併せて、現地日系社会に本事業を広くアピールできる機会をとらえて実施した。

コース	日程	研修生
(1) 日本食	平成 30 年 7 月 20 日～7 月 22 日	155 名（ブラジル 155 名）
(2) 施設園芸	平成 30 年 9 月 21 日～9 月 23 日	170 名（ブラジル 170 名、うち本事業研修生として 3 名）
(3) 農業経営	平成 31 年 2 月 2 日～2 月 16 日	290 名（ブラジル 177 名、アルゼンチン 3 名、パラグアイ 52 名、ボリビア名 58 名）

(1) コース 1：日本食

1) 基本情報

専門家	康本 高晶（やすもと たかあき、日本国籍） レストラン「やきとり」オーナーシェフ
期間	平成 30 年 7 月 20 日～7 月 22 日（計 3 日間）
場所	ブラジル パラナ州マリンガ市
参加者	合計 155 名（7/20: 36 名、7/21: 34 名、41 名、7/22: 44 名）
内容	ブラジルのパラナ州マリンガ市で開催された日系人移住 110 周年記念「EXPO IMIN 110」を日本食紹介の機会を捉え、日本食のワークショップを行った。専門家研修として、研修生は講習を受けると共に、広く催しを訪れた人々に、現地調達可能な食材を用いた日本食の調理実演を通じて、日本食普及を行った。内容は出汁の取り方や煮物、醤油ラーメン、天ぷらうどん、ざるそば、茶碗蒸し等の作り方をデモンストレーション。さらに紹介した料理のレシピを配ることにより、紹介したメニューの定着を図った。また、当該ワークショップは日本の農林水産省が主催していることもアピールする機会とした。

2) 参加者

回	日程	人数	組織
第 1 回	7 月 20 日	36 名	マリンガ文化スポーツ協会 ACEMA、マリンガ市民等
第 2 回	7 月 21 日	34 名	マリンガ文化スポーツ協会 ACEMA、マリンガ市民等
第 3 回	7 月 21 日	41 名	マリンガ文化スポーツ協会 ACEMA、マリンガ市民等
第 4 回	7 月 22 日	44 名	マリンガ文化スポーツ協会 ACEMA、マリンガ市民等

3) 日程

日数	日付	曜	内容	場所
1	7 月 19 日	木	サンパウロ出発、マリンガ到着	マリンガ
2	7 月 20 日	金	第 1 回料理講習会（出汁、醤油ラーメン、ざるそば、煮物、味噌汁等）	マリンガ
3	7 月 21 日	土	第 2 回料理講習会（煮物、焼きそば等）、第 3 回料理講習会（天ぷら等）	マリンガ
4	7 月 22 日	日	第 4 回料理講習会（茶わん蒸し、焼き鳥）	マリンガ
5	7 月 23 日	月	マリンガ出発、サンパウロ到着	マリンガ



熱心に聞く参加者



日本食の講習会

4) 研修の成果・考察

- 3日間にわたって計4回の料理講習会を実施し、参加者からも非常に好評であった。各講習会では、出汁（魚・鳥）、天ぷらうどん、醤油ラーメン、ざるそば、やきそば、煮物、味噌汁、茶碗蒸しの全てを作り、それぞれの料理のキーポイントを伝えた。参加者には講習会で作った料理のレシピを配布し、実際に家庭でも作れるようにした。
- 会場には、42席設けていたが、毎回満席に近く、第4回では42席を上回る参加者があった。全体的には8割以上の参加者が女性であった。年齢層としては40～50代が多かったが、20～30代の方もいた。4回の合計で155名が講習に参加。参加者の名前から判断すると、およそ6割の参加者が日系人であった。日系人移住110周年記念イベントに合わせて日本人の専門家を派遣することで、日本の食文化をブラジルの人たちに広く普及した。

5) 参加者の所感

- とても素晴らしい講習会だった。シェフは親切で、手際も良く、教え方が非常に分かりやすかった。シェフは日本食に関して幅広い知識を持っていて驚いた。
- 本当の日本の味を知った。和食の知識が増えた。出汁の取り方、エビの剥き方、天ぷらの揚げ方等、コツを教えてもらえてとても良かった。
- このような機会を増やしてほしい。もっと長い時間でも良かった。
- TVモニターにシェフの手元を映してもらえれば、さらに良かった。講習中は人の出入りを禁止にしてほしい。



焼き鳥のたれの説明



近くで見て確認する参加者

(2) コース 2：施設園芸

1) 基本情報

専門家	後藤 るみ（ごとう るみ、日本国籍） 元サンパウロ州立大学 教授
期間	平成 30 年 9 月 21 日～9 月 23 日（計 3 日間）
場所	ブラジル サンパウロ州バストス市
参加者	合計 170 名（内、本事業研修生として 3 名が参加）
内容	日伯文化福祉協会の農村委員会「文協 Rural」では農業の課題について議論する講習会「文協 RURAL」を毎年 1 回実施しており、第 9 回となる 2018 年は日本の習慣でもある「もったいない」をテーマに、無駄をなくし再利用を促す考えについて学ぶ講習会が開催された。講習会の講師の一人として、本事業から野菜栽培を専門とする後藤氏を派遣し、施設園芸農業において、「もったいない」という視点から、雨よけや遮光ネット、温度障害防止といった天候等の自然環境からくるリスクを回避して、野菜の品質・生産性向上のための講習を実施した。本事業からの受講生は併せて他の講演聴講、関連施設の視察、展示品の視察等を行い、他の参加者との意見交換も行った。

2) 研修生

No.	性別・年代	国	組織	業務
1	男性 50 代	ブラジル	バストス文協	組員
2	男性 40 代	ブラジル	バストス文協	組員
3	女性 50 代	ブラジル	ブラジル農協婦人部連合会 ADESC	会員

3) 日程

日数	日付	曜	内容	場所
1	9 月 21 日	金	開会式 講演「もったいないとは」 講演「施設栽培のオプションと可能性」後藤るみ専門家 他の講演（太陽光エネルギー、養蚕等） 視察「卵の街バストス（養鶏場、飼料工場）」	バストス
2	9 月 22 日	土	講演（デジタル農業、希少果物、バイオエネルギー） 視察「グリーンツーリズム」	バストス
3	9 月 23 日	日	視察「バストスゴルフクラブ」 閉会式	バストス
終日			【出展者の展示】 ヤンマー、ホンダ、Jacto、Nutrisafra、Sansuy、Artesanato dos Índios kaingang de Arco-Íris、Produtores da ITESP、SICES Energia Solar	



講演の様子

4) 研修の成果・考察

- 野菜栽培の現場は、果物と同様に廃棄処分されている農産物の量が多く、ブラジルの場合は生産量の30%はロス（流通と輸送から貯蔵、消費まで）と言われている。後藤専門家の講演のテーマはAgricultura Protegida: Opções e Oportunidades（施設栽培：オプションと可能性）で、天候等の自然環境からくるリスクを回避する選択肢によって、どういった利点があるか、外国をはじめ様々な事例を挙げて説明をしてもらった。
- 例えば施設（ビニールハウス）を設けて栽培することで雨による病害のリスクを軽減する、遮光ネットを用いる事で高温・太陽光線の障害リスクを軽減する、交配種の種を使い土壌障害のリスクを軽減する、など。
- 本事業からの参加者は3名であったが、全体では170名程度の参加があり、文協RURALに専門家を派遣することによって、本事業の直接の関係者ではない人達にも広く普及することができた。

5) 参加者の所感

- 収穫期間を通常の露地栽培よりはるかに長く伸ばすことで、生産コストを下げて単収を上げ利益率を高めることが出来るという話が興味深かった。
- ハウスを建てることによって雨よけになり、病気の発生が減少して農薬の使う量も少なくなる、さらに一年中作物を栽培できるようになるといった様々な利点に納得した。
- 他の講演の中で特に強い興味を引いたものに、デジタル農業（精密農業）があった。従来は人間がしていた仕事を自動化する、肥料・殺虫剤・除草剤を散布する場所を細かく適切に把握することで無駄を省けるなど、驚くことが多かった。収量データ、天候の予想等からその年の収穫量のシュミレーションでき、相場傾向にあわせた生産計画が出来るようになるなど、技術の進歩に驚かされるばかりだった。ドローンの活用も益々増えることが予想される。



ARTABAS 養鶏場視察



柿本セルジオ氏グリーンツーリズム視察

(3) コース 3：農業経営

1) 基本情報

専門家	澁谷 喜久（しぶや よしひさ、日本国籍） NPO 法人自然塾寺子屋顧問、元群馬県農政部長
期間	平成 31 年 2 月 2 日～2 月 16 日（計 15 日間）
場所	ブラジル、ボリビア、パラグアイ
参加者	290 名（ブラジル 177 名、アルゼンチン 3 名、パラグアイ 52 名、ボリビア名 58 名）
内容	長年群馬県で農業振興、農協育成、農業従事者若手の育成および農業ビジネスへの新規参入事業に携わっていた元群馬県農政部長の澁谷氏を専門家として派遣し、その経験から南米各農協において経営、ビジネス起業、若手育成について日本での好事例を紹介しながら、ブラジル国サンパウロ州、同国パラナ州、ボリビア国サンタクルス県、パラグアイ国アルトパラナ県、同国セントラル県において指導を行った。 同氏が農政部で携わっていたぐんまフロンランナー養成塾は、経営視点を有した農業人材を育成するものであり、2 月 4 日に開催した「第 2 回第 2 回若手農業者等を対象とした交流会」での助言、パラグアイでは、2 月 16 日に開催された農協中央会主催の「第 14 回日系青年の集い」にて農業後継者育成に関する講演を行った。

2) 参加者

No.	日付	国	場所	参加者
1	平成 31 年 2 月 4 日	ブラジル	サンパウロ（若手農業者等を対象とした交流会議）	44 名
2	平成 31 年 2 月 6 日	ブラジル	モジダスクルーゼス農村組合	49 名
3	平成 31 年 2 月 7 日	ブラジル	南伯サンミゲールアルカンジョ農協&サンパウロ州柿生産者協会	41 名
4	平成 31 年 2 月 8 日	ブラジル	レジストロ地域農業生産者協同組合	21 名
5	平成 31 年 2 月 11 日	ボリビア	サンフアン農協	19 名
6	平成 31 年 2 月 12 日	ボリビア	コロニア沖縄農協	37 名
7	平成 31 年 2 月 14 日	ブラジル	ユニオンカストレンセ農協	33 名
8	平成 31 年 2 月 16 日	パラグアイ	イタウグア日系青年の集い	46 名

3) 日程

日数	日付	曜	内容	場所
1	2 月 2 日	土	成田空港発	
2	2 月 3 日	日	サンパウロ着	ブラジル
3	2 月 4 日	月	第 2 回若手農業者等を対象とした交流会議（講演）農業ビジネスセミナー	ブラジル
4	2 月 5 日	火	第 2 回日系農業者等連携強化会議	ブラジル
5	2 月 6 日	水	モジダスクルーゼス農村組合（講演）	ブラジル
6	2 月 7 日	木	ピラールドスル APPC 農協、南伯サンミゲールアルカンジョ農協（講演）	ブラジル
7	2 月 8 日	金	レジストロ地域農業生産者協同組合（講演）	ブラジル
8	2 月 9 日	土	CEASA 卸売青果市場視察	ブラジル
9	2 月 10 日	日	ボリビアへ移動	ボリビア
10	2 月 11 日	月	サンフアン農協 CAISY（講演）	ボリビア
11	2 月 12 日	火	コロニア沖縄農協 CAICO（講演）	ボリビア
12	2 月 13 日	水	サンパウロへ移動	ブラジル
13	2 月 14 日	木	ユニオンカストレンセ農協（講演）	ブラジル
14	2 月 15 日	金	イグアス国立公園、イグアス移住地視察	パラグアイ
15	2 月 16 日	土	第 14 回日系青年の集い（講演） ※以降、JICA 事業へ参加	パラグアイ



第2回若手農業者等を対象とした交流会議での講演



ピラールドスルの農家との意見交換

4) 研修の成果・考察

- 消費者が何を望んでいるかを知る必要があること、社会情勢を常にウォッチすること、自分の強み弱み、脅威となる点を分析する、といった頭では分かっているようなことであっても、澁谷専門家の講演で改めて気が付かされたようであった。外部の人間、まして日本から来た専門家から話を聞くことで、同じ話も腑に落ちる効果がある。
- 担い手の育成の点で、後継者を望むなら若手の考えもしっかり聞き、そしてさせてみて、それを離れて見守る姿勢が必要であると説き、年配者にはあえてお願いするような口調で説明をしていた。
- 組合は自分のものであるという意識が組合員に希薄であることは、日本でも同様な状況があるようだ。しかしながら、そういった問題を克服していくには、作るのは我々、売るのは組合と言う意識を改めて、自分の組合が営業で有利に立ち回れていないのであれば、組合員自身もそれぞれの人間関係等を駆使して協力していかなければ組合は成り立っていかない。組合がなぜ必要だったかという原点に戻って考えることが大事であると説明がされた。
- 強い農業経営、若手人材育成を大きなテーマに、群馬県での事例を示しながら、各地域の現状や課題に合わせて講演をしてもらった。どこの訪問先でも20～40名程度の参加者があり、質問が飛び交うなど参加者の熱意が感じられた。参加者からもいい話が聞けた、今後の活動に活かしたいといった声も聞かれ、一定の成果を残したと思われる。一方ですぐに成果が目に見えるテーマではないため、若手人材育成については本事業でも多方面からフォローしていくことが必要である。

5) 専門家の所感

担い手育成

- 今回、担い手育成を目的として、群馬県での取組をお話させていただいた。直ちに成果に結びつくものは少ないと思うが、5年後、10年後に熱心に講演を聞いてくれた若手が経営の中心となった時に、円滑な経営継承や、経営理念に基づく経営計画の樹立などを通じた経営改善にと少しでも役に立っていればありがたいと思う。
- ボリビアのサンファン農協（CAISY）、コロンビア沖縄農協（CAICO）、ブラジルのユニオンカストレンセ農協では、講演に使用したパワーポイントを資料として提供したいとの声があるなど、講演が直接的に若手の意識改革に役立った面もあったと考える。
- 各地域で一定の農業経営が確立される中で、農協の組合長は異口同音に「若い担い手は現状に満足してしまい、新たな取組に積極的でない。」との意見があった。移住地の将来を担う意欲ある担い手を育成するため、今回紹介した塾のような勉強会を農協が開催し、経営者としてのスキルアップを支援することも有効な方策であると思う。

農業経営

- 農産物の施設整備や営農サービスなど、日系農協の体制は日本よりも充実している面も多々あると思われる。こうした中で、穀物を中心とした大規模経営が多いことなどから、「農協に出荷す

ればそれで終わり。販売は農協の仕事。」という意識が徐々に強くなり、組合員として農協運営に参画するという意識が薄れてくることを、各農協長が危惧していた。

- 日本では、こうした課題を解決するため、農産物を消費者へ直接PRするなどの取組を積極的に行っている。穀物ではなかなか難しい面もあると思うが、小麦粉の加工に取り組む農協で、そのPRを生産者が行うなどの取組も考えられる。また、若手に農協運営に対する提案を積極的に求め、それを運営に活かすことで、一体感を着実に醸成していくことも重要ではないだろうか。



コロニア沖縄農協の小麦製粉工場



コロニア沖縄農協での講演



パラグアイ・イタグア市での第14回日系青年の集い



講演の様子